

佳作

酔っぱらいのひとりごと

金城光子

一人でお酒を飲んだ。

最初はビールにした。ビールは何本だったか忘れた、次にワイン。酔いが回ってきたら急に寂しさが押し寄せ涙がひとりでに滝のように流れてきた。泣き上戸じゃないのにオイオイと声まで出す始末。何がこんなに寂しいのか解らない。そして酔っぱらいはノートを出して書き始めた。

今年は彼の十三回忌。しきりに十三という数字が脳裏をよぎる。生きている人にそのことを知らせるために、そんな約束ごとがあるのだろうか？彼と結婚したのは私が二十八。彼は一つ年下だった。当時一つ年下のお相手は金の草鞋を履いてでも探しなさいと言われていた。

彼は真面目な中学の教師、私は麗しい診療所の天使、映画にでも出てきそうなカップル。

しかもできちゃった結婚、当時としては考えられなかったかなー。

でも、ラッキーだった。あれから子宝に恵まれなかったんだからと呟く。今年私は六十六。彼は五十二で逝き、結婚生活は銀婚式にも満たなかった。

一人ぼっちで寂しいかい

天涯孤独と言ってるのかい

何をそんなに悲しがっている

愛する息子夫婦も可愛い孫もいる

一番の幸せ者だろうに贅沢というもんだ

天井の方から声が聴こえてきた。

何を解ったふうなことを言っ

私のことは何も知らないくせに

天井に向かって言い返す。

仲間や友達も沢山いる。でも、どうしようもなく一人ぼっちだと思う時がある。

天井の声はやや声高に

だから贅沢と言っているのだ

急に酔っぱらいは、おとなしくなる。

寂しいのはね天井さん、きつと彼と「さよなら」のお別れをしてないからだと思うのよ。今だから話すけど、彼は突然死んじやったの。

その時私は出張中。しかもよ、その二日前から喧嘩をして口も聞かずに家を出たってわけなの。それが最期だったとはあまりにも無情ではありませんか。病気で少しは看病するなり、ドラマのように「貴方と一緒になくて幸福でした」とか、何かお別れをする機会を与えてくれてもいいんじゃない。いくら神さま不在の月だからと言っても。

それが悔しいのよ

ねエー天井！なんか返事してみる

この天井野郎

いよいよ酔っぱらいはエスカレーターする

それともう一つ。葬儀の三日間のことをほとんど覚えてない。何処で告別式をして、何処を通ってお墓へ行つたか、しかも一番大切な骨拾いさえ覚えていない。悔しいというか、後悔してるというか。でも一つだけ覚えていることがあるの。それはお通夜の二人だけの時にね、若い時のそれも写真屋さんで撮ってもらった二人の写真を彼の胸元にそっと隠し入れたこと。それだけよ。

よく言うでしょ。棺の中にはあの世で必要な物を持たせるって、でも私はそれだけ。それだけなの。

彼の死を認めたくなかった。でも今は家に帰ったら仏壇の写真に話かけ

るの『ただいま。今日は食事をしてきたの』って。

聞いているの天井さん

人前では泣けない。通勤の時の車の中ではオイオイ思い切り泣いた。そして今日みたいにビールを飲む。一杯が二杯、二杯が三杯。まあ幸せ者ですよ。なのになのに寂しくなる。

今日は飲み過ぎたかな〜テレビでは坂本九ちゃんの歌がこれでもかと鳴り響いている。涙しながらビール、ワイン、梨、キムチを口にしていく。私は良い妻でもなく良い母親でもなく、彼にとってどうだったんだろう。でも私は幸せだった。それは確信している。彼はどんな時も私のことを第一に考えてくれる人だった。

あー彼にお別れが言いたかった。

酔っぱらいは力が尽きたか静かになり

「天井さん おやすみなさい」

「おやすみ 酔っぱらい

また聞いてやるよ、その愚痴を」

捨てられずに箆笥の奥に仕舞いたる

着古した亡夫の好みしジャケツト